

物語るアート——絵本を開いて心の旅を

執筆者…原島恵

掲載誌…『アートの処方箋』小澤基弘 監修（水声社）

太古より人類は、物語を求めてきました。世界中で神話や教典の物語は、寺院や教会を飾る絵画や写本などによって伝えられ、社会の規範をつくってきました。今日では、ひとつの共同体を統べるような大きな物語を共有することは、もはや難しくなりました。しかし、依然として私たちは日々、さまざまな物語を求めています。天災やパンデミック、戦争といった大きな社会不安が生じる度に、自身のよりどころや、事象の背景にある意味をさぐるために、物語を求める傾向が強くなるのではないのでしょうか。また、時に、私たちは、生きることの答えを見出そうとして物語を求めるあまり、苦しむこともあります。例えば、出世や成功という物語、理想の恋愛という物語、家族という物語……。幻想ともいえる物語に囚われて、窮屈な気持ちになってしまうことはないでしょうか？

そんなときは、絵本の出番です。絵本には心のバランスを保ってくれる物語の世界があります。児童文学者の瀬田貞二は、子どもたちが受け入れやすい物語の型として、「行きて帰るし物語」を挙げています（瀬田貞二著『幼い子の文学』中央公論社、一九八〇年、三―三二頁）。例えばウクライナ民話の絵本『てぶくろ』（エウゲーニー・M・ラチョフ絵、うちだりさこ訳、福音館書店、一九六五年）もそのひとつです。おじいさんが森のなかで落とした片方の手袋のなかに、最初はネズミやカエルが入り、次にウサギやキツネといった少し大きな動物が順に入ります。最後には大きなクマまでが入ろうとしたところに、おじいさんが手袋を探しにもどってくるという物語です。日本では、ラチョフの絵で親しまれ、刊行から五〇年以上経った今も読み継がれています。ラチョフの絵には、テキストには書かれていない要素が描かれています。動物が増えていくたびに、手袋はなんとも居心地よさそうにリフォームされ、違和感なく動物たちをそのなかに収めていきます。また、虚栄心が強そうなメスの

キツネは祝祭用の民族衣装を着ているなど、動物たちはそれぞれの性格や社会的な属性を表す装いをしています。こうした描写が物語の世界をより確かなものに行っているといえるでしょう。

イラストレーション(illustration)ということばは、ラテン語で「照らす」を意味する *lustrare*、さらには光を意味する *lux* (ルクス) に由来しているといわれています。語源のとおり、良質の絵本の絵は、単に説明的であるよりも、ことばがひろっていない部分に光を当てて物語を豊かにしています。世代を超えて長く親しまれてきたロングセラーの絵本の多くは、絵とことばが補いあって、想像の世界を鮮やかに照らし出しています。現実の窮屈な「物語」から逃れ、絵本を開いて、自分の好きな速さでページをめくれば、想像の世界へ行って、充足感とともに現実に戻ってくるができるでしょう。

文筆家の千野帽子は、「行きて帰りし物語」の型にあたる昔話のように、「ストーリー的な解釈によって非常時を切り抜け、失われた平常を取り戻したいという感情を、感情のホメオスタシス」と名づけています(千野帽子『人はなぜ物語を求めるのか』筑摩書房、二〇一七年、八〇頁)。わたしたちには、根源的に物語を求める原理が備わっているともいえるでしょう。日々の生活のなかで少しずつ心を削り取られている大人にこそ、絵本の物語のなかにゆっくりと流れている時間や、おおらかな感覚で心の平衡を取り戻す必要があるのかもしれない。例えば、『ガンピーさんのふなあそび』(ジョン・バーニンガム作、みつよしなつや訳、ほるぷ出版、一九七六年)はいかがでしょうか? ガンピーさんが舟で出かけると、男の子と女の子、ウサギ、ネコ、イヌ、ブタ、ヒツジなどが次々に「いっしょにつれてって」と声をかけてきて、順に舟に乗り込みます。すしづめ状態になった舟のなかで、みんなじっとしていることができずに、とうとう舟は転覆してしまいます。ガンピーさんは終始声を荒げることもなく、みんなを川岸に導いて、おひさまで体を乾かしてから、家に招いてお茶の時間を楽しみます。日が暮れて家路につくみんなを送り出しながら、ガンピーさんはこう言います。「また いつか のりにおいでよ」。この絵本では、豊かな自然を舞台にゆっくりと流れる時間が描かれています。唯一の大人であるガンピーさんは、子どもや動物のそれぞれの個

性を尊重し、失敗をおおらかに見守り、みんなで一緒に過ごす時間をゆっくり楽しんでいきます。作者のバーニンガムは、どの場面も短いことばと素朴な線と淡い色彩による余白を残した描写で丁寧な物語を描き出しています。

「イラストレーション」の語源の通り、光で物語を照らしだしているのは、荒井良二の絵本『あさになったのでまどをあけますよ』です。ページをめくると、山間、田園、都会、川や海のそば、それぞれに人々が住まう風景が展開します。人々が日々の営みを始める前の静かな朝、すべての場所に等しく差し込む朝の光は、あらゆるものを滑らかに浄化しているようです。天災、パンデミック、そして戦争、さまざまな困難に直面するこの時代に、荒井は絵本を通じて希望の光を投げかけ続けています。

近年では、大人も対象にした優れた絵本が数多く発表されています。代表的な作家がショーン・タンです。彼が著した『内なる町から来た話』（ショーン・タン著、岸本佐知子訳、河出書房新社、二〇二〇年）が、二〇二〇年に児童書の大きな賞であるケイト・グリーンナウェイ賞を受賞したことは、子どもの本の歴史において画期的な出来事といえるでしょう。この絵本では、都市のなかの動物をテーマにした現代の寓話が鮮やかに視覚化されています。空を泳ぐ魚をとらえる少年、法廷にクマを導く弁護士、部屋いっぱいのおうまのオウムと対話する男、町を覆いつくす夥しい数の蝶に歓喜する人々……。ヒトを含む二五の動物をモチーフにした短篇には、人間中心社会への警鐘が響いています。しかし、それらの物語は、単なる戒めや社会的なメッセージの枠に収まらず、結末は読者にゆだねられています。物語は、彼が描く白昼夢のようなイメージによって、圧倒的に不可解な世界に放たれています。通常、書籍や絵本の原画は、原寸大か一二〇パーセントくらいのサイズで描かれることが多いのですが、この本の原画は高さ一メートル、幅は一・五メートルという大きさのキャンバスに描かれた油彩です。タンは、自身の身体性を跡付ける生々しい筆致でとらえた迫真の描写で絵本に新境地を拓きました。

この絵本に先立ち、彼の名を世界に知らしめたのは、二〇〇六年に発表した長編絵本『アライバル』（ショーン・タン著、河出書房新社、二〇一一年）です。妻と娘を守るため、新天

地に赴いた男が紆余曲折の末、家族を呼び寄せるまでの物語は、六章立て、全一二八頁におよび、ことばが一切使われていません。タンは、制作にあたり、漫画の文法も研究し、コマ割りの絵、一ページの絵、見開きの絵で場面を構成し、映画のようにカメラワークを意識して、緩急をつけた展開で、空間の移動や時間の経過をとらえています。約五年の歳月をかけて緻密に構築された架空の国を舞台にした移民の物語は、読者であるわたしたちの想像力が原動力となり、いきいきと動き出します。古い写真アルバムのような体裁を持つこの本は、国境や世代を越えてわたしたちが共有する家族の物語といえるかもしれません。

タンは、グラフィックノベル、挿絵入りの短編集、絵本、コミックスと表現形式を変え、それぞれに写実的な描写、漫画風にデフォルメした線、歴史画のように重厚な油彩、カラージュなど、さまざまなスタイルを融通無碍に使いこなしています。そして、作品ごとに絵と文のバランスを吟味して、ことばが語らない部分を絵に語らせ、絵とことばのつなぎ目に私たちが誘いこみます。彼の物語の世界に入ってみると、同じ登場人物やモチーフ、舞台設定が繰り返り現れることに気がつきます。彼がこれまで紡いできた物語はどれも閉じられておらず、底の方で大きな世界につながっているようです。彼が、日々インスピレーションを描き留めるスケッチブックには、今も『アライバル』の登場人物が描かれ、片隅に描かれた奇妙なイメージが数年をかけてひとつの物語へと展開していきます。

閉塞感に満ちた現実を一皮めくれば、タンが描く「どこでもないどこか」が本当に存在するのではないか。二〇一九年に彼の個展を開催した折に、たくさんの人が展示室で作品を前に静かに熱狂する様子を見て、私はそう確信しました（展覧会「ション・タンの世界展」どこでもないどこかへ」ちひろ美術館、二〇一九年五月一日―七月二十八日）。どこか欠落しているけれど天真爛漫な登場人物や、心優しい異形の生き物たちが住まう奇想天外なタンのファンタジーの世界は、受け手が主体となってイメージとことばをつないで物語を紡ぐことで、リアルな手触りを持つものへと反転していきます。その想像の領土は今も着々と拡大し続けていて、読み手であるあなたを待っていることでしょう。